岐阜県可児市桜ヶ丘ハイツを対象とした
郊外戸建住宅団地における近居と家族類型に関する研究

－ライフステージを考慮した家族類型に基づく分析を通して－

A STUDY OF LIVING NEAR RELATIVES AND FAMILY TYPE IN SUBURBAN DETACHED HOUSING
ESTATES AS THE TARGET “SAKURAGAOKA-HAITSU” IN KANI CITY, GIFU PREF

－ Through analysis based on family type considering life stage －

深井 祐紘^{*1}, 矢吹 慎^{*2}, 大月 敏雄^{*3}, 李 鎔根^{*4}Yoshihiro FUKAI, Makoto YABUKI, Toshio OTSUKI
and Yonggeun LEE

'Kinkyo' (living near relatives) is attracting attention as one of measures for declining birthrate and aging in Suburban Detached housing estates. In this research, We focus on the relationship between 'Kinkyo' and family type in Sakuragaoka-Haitsu District in Gifu where 'Kinkyo' inside is as high as 17.5%. We clarified how far the family lived, and the purpose and frequency of interaction with the family within each type of family. As a result, it is confirmed that women are doing 'Kinkyo' more and closer than men and that the parenting household performed 'Kinkyo' most.

Keywords: living near relatives (Kinkyo), family type, detached house, newtown, stepwise development

近居, 家族類型, 戸建住宅, ニュータウン, 段階的な開発

1. 研究の背景と目的

戦後日本の都市部では、経済発展とそれに伴う人口集中によって、住宅地不足となった結果、数多くの郊外住宅地をつくったが、多くの郊外住宅団地において、住宅不足の解消と開発時の事業者の都合により、地区全体を一斉に分譲をする事となった。そのため入居する世代は概ね一次取得層と呼ばれる子育て世代が中心となった結果、皆が同じように歳を取るとともに子ども世代が独立し団地を巣立って行くことで、少子高齢化や空き家の増加が加速度的に発生していることが問題となっている。

そのような状況の中で、新たな住宅地政策の一つとして「近居」が注目されている。URや各地の地方自治体では、近居を対象とした居住支援策を講じている。また2015年3月に閣議決定された少子化社会対策大綱でも「三世同居・近居の促進」が掲げられるなど、ますます注目が集まっている。

近居に関しては、近年それに関する書籍¹⁾²⁾が出版されるとともに、研究としては上和田ら³⁾は一連の研究で近居における家族間のやりとりや地域ごとの発生傾向をまとめている。今井ら⁴⁾は世帯構成別の既婚別居子の近居距離の傾向についてまとめていると同時に、居住年数別に入居理由の把握をすることによって近年の入居理由として近居が増加していることを指摘している。郭ら⁵⁾は韓

国の分家が慣習として行われている地域における隣居・近居家族のやり取りの実態を把握している。

しかし、その量的な実態等については、国勢調査をはじめ各種統計調査では把握することが難しい。学術調査では、金ら⁶⁾は横浜市の賃貸・分譲併設集合住宅団地における近居の状況を調査し、団地内での近居率を賃貸で12.3%、分譲で14.7%であることを把握している。樋野ら⁷⁾は埼玉県にある遠郊外の戸建住宅地において、相手ごとの近居状況を調査し、子世帯が6%、親世帯が5%で全世帯の9.4%が団地内で近居しており、特に戸建住宅よりも安価なタウンハウス居住者に多く、団地内近居に資する実態を把握している。また、拙稿⁸⁾においても団地内での近居が確認されているが、その量についてのみの確認となっており、本研究においてはそれを更に詳細に確認している。

前述の『近居』¹⁾においては、様々なケースにおける事例の紹介がなされているものの学術研究は少なく、上記のものに限られる。

前述の通り、各種統計で把握することは難しい上に、様々な団地における近居の数の把握は行われているものの、これらの調査では、各対象地で近居が発生していることの確認にとどまっている。そこで本研究では、まず、団地全体の居住者の家族がどのような状態になっているのかを類型化することで確認する。次に、近居はど

*1 (株)プレイスメイキング研究所 研究員・博士(工学)

*2 元東京大学大学院工学系研究科建築学専攻 修士(工学)

*3 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻 教授・博士(工学)

*4 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻 助教・博士(工学)

Researcher, Placemaking Institute Inc., Dr.Eng.

Former Dept. of Arch., Graduate School of Eng., Univ. of Tokyo, M.Eng.

Prof., Dept. of Arch., Graduate School of Eng., Univ. of Tokyo, Dr.Eng.

Assist. Prof., Dept. of Arch., Graduate School of Eng., Univ. of Tokyo, Ph.D.

Fig.1 Area map of each block in "Sakuragaoka-Haitsu"
桜ヶ丘ハイツの各地域図

Fig.2 Comparison of population composition in each area of "Sakuragaoka-Haitsu" (National Census 2015)
国勢調査 (2015) による桜ヶ丘ハイツ各地区の人口構成比

Table1 Summary of questionnaire results
アンケート結果の概要

	number of houses 住戸数	number of valid answers 有効回答数	Effective response rate 有効回答率
Sakuragaoka 桜ヶ丘	1,355	623	46.0%
Satsukigaoka 皐ヶ丘	1,369	1,052	76.8%
Katsuragaoka 桂ヶ丘	422	217	51.4%
total 合計	3,146	1,892	60.1%

のくらいの距離でどの程度生じているのか、その近居相手の属性はどのようになっているのか、また、近居関係にある家族同士のやり取りがどのようになっているのかということについて詳細に把握する。更に、それぞれと家族類型との関係を確認することで、近居について既往研究等で一般的に言われている、「妻の親＝娘との近居が多い、子が親の家に行くことが多い」といったことを現象として正確に把握するを目的としている。

2. 研究の方法

2-1. 調査地の概要 (Fig. 1、2)

本研究では、筆者らが実施した全国の戸建て住宅地を対象とした調査^{注1)}をもとに、地方都市の郊外戸建住宅団地でかつ段階的な開発が行われた岐阜県の桜ヶ丘ハイツ (Fig. 1: 以下ハイツ) において、団地内近居が一定数生じている^{注2)}ことが確認されたため対象地として選定した。ここは、段階的な開発により、子世代が居を構える際に新築分譲をしていることが影響していると考えられる。

ハイツについてはすでに海道⁹⁾¹⁰⁾が詳細に紹介しているが、名古屋市中心部から30kmほどの距離に位置しており、中部圏の郊外戸建住宅団地として開発され1974年に入居が開始された。「軽井沢のような住宅地をめざす」ということを理念として計画され、全計画面積は316haで、前述の通り段階的に開発されている団地である。開発順に桜ヶ丘地区 (入居開始1974年、以下桜ヶ丘)、皐ヶ丘地区 (同1982年、以下皐ヶ丘)、桂ヶ丘地区 (同1994年、以下桂ヶ丘)、櫻ヶ丘地区 (未開発) の4地区で構成されている。

2015年現在の世帯数及び人口は桜ヶ丘が1,424世帯3,626人、皐ヶ丘が1,382世帯3,847人、桂ヶ丘が409世帯1,426人となっ

Fig.3 Comparison of population composition by household members of questionnaire and Natinal Cecsus 2015 in residential estates "Sakuragaoka-Haitsu"
アンケート回答者世帯の構成員と2015年国勢調査による桜ヶ丘ハイツの人口構成比

ている。それぞれの地区の世代別人口構成比を見ると (Fig. 2)、入居開始後約20年の桂ヶ丘では40代と10代にピークが、同約30年の皐ヶ丘はピークの60代からなだらかに40代50代があり、そして10代に小さなピークがある。同約40年の桜ヶ丘では60代後半に大きなピークがあり、40代と10代に小さなピークがあり、概ね一般的な戸建住宅団地における人口動態と一致する。

2-2. 調査の概要 (Table 1、Fig. 3)

2014年9月にハイツ内3自治会 (桜ヶ丘、皐ヶ丘、桂ヶ丘) の協力で、団地内全世帯に対するアンケート調査を行った^{注3)}。アンケートの有効回答数は1,892 (有効回答率60.1%) で (Table 1)、回収したアンケートの家族構成から作成した人口ピラミッド (Fig. 3: 灰塗り) と同時期に行われた国勢調査 (2015) による人口ピラミッド (Fig. 3: 白抜き) を比較すると、95歳以上の割合は下がってしまっているが、95歳未満のみについて見ると、平均値55.0%、標準偏差6.7%となっており、各世代で大きな偏りが無く、概ね団地の居住者の概要を捕捉できていることが確認できる。

2-3. 本研究の分析方法と構成

本研究では、まず3章においてハイツ内に居住している家族を独自に考案した方法で類型化し、どのような家族類型が支配的なのかを確認する。それをもとに、4章にて近居の状況について論じる。続いて5章では近居相手とのやり取りに焦点を当てて論じる。

なお、近居には様々な定義があるが、お互いに助け合って生活するというその目的を前提として、正月や盆などの年中行事以外で直接会うことが重要と考え、それをやり取りとし、月1回以上のやり取りがある別居家族・親族の状況を把握するため、アンケートの作成および集計を行った。なお、相手の情報として得られたものは、相手との関係・年齢・性別・居住地・行き来にかかる時間・やり取りを行う頻度のみであり、相手の家族構成は確認できていない。

3. 本研究で用いる家族類型について

本章では、既存の家族類型では一括りにされてしまうものやその他に分類されてしまうような家族をも含めて類型化することを目指

Fig.4 Respondent age and attributes of Kinkyo partner (parent and child)
アンケート回答者の年齢と同居相手の属性（親子）

し、独自に家族類型を考案した。まず、家族を構成する世代の数に着目し、各世代の構成員の関係を年齢をもとに分類し、かつ世代や各世代の関係、年齢を表す新たな表現を試みた。

3-1. 年齢による家族類型の分類 (Fig. 4)

近居に注目していることから、年齢の分類に関しても近居の状況をもとに分類することとする。近居において特に重要だと考えられる関係は親子であると考えられることから、60分以内^{注4)}に親が近居している回答者と子が近居している回答者を年齢ごとにみると (Fig. 4)、50歳以上で子供と近居している人が発生していることが確認できる。これはこの年齢あたりから子供が独立して居を構えだし、近居を論じる上では重要な年齢だと考えられるため、49歳以下と50歳以上を分けて考える。その他の年齢区分に関しては、多くが親元から通うと考えられる高校生以下（18歳以下）、前期高齢者（65歳以上74歳以下）、後期高齢者（75歳以上）で分類する。

3-2. 世代、世代構成員の関係、年齢区分による家族類型の試案

まず、世代の数に着目しそれをⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳで分類する。

次に各世代構成員の関係^{注5)}は単身の場合はi、夫婦の場合はp、兄弟姉妹の場合はsとする^{注6)}。

最後に各世代の年齢は3-1.をもとに1(0-18歳:就学期)、2(19-49歳:若年期)、3(50-64歳:壮年期)、4(65-74歳:前期高齢期)、5(75歳以上:後期高齢期)と分類する。なお、各世代の構成員が複数の場合は、1は対象世代のうち最も若年のもの、4,5は対象世代のうち最も高齢のもの、3は対象世代が50-64歳のみによって構成されているものとし、2はそれ以外とする。

以下、それぞれの世代の記述方法を詳細に示す。1世代のみの世帯（単身、夫婦のみ、兄弟姉妹など）についてはⅠに続けて、世代の関係および年齢を下付き文字で記載する。例えば、75歳以上の単身世帯はⅠ₅となる。2世代の場合はⅡに続けて、各世代の関係および年齢を上の世代を上付き文字で、下の世代を下付き文字で記載する。例えば、40代夫婦の子育て世帯はⅡ₂²⁰となり、75歳以上の両親と同居する50代夫婦の世帯はⅡ₃⁶⁵となる。3世代については、中央の世代は現役世代であることが多いと考えられるため^{注7)}、中央の世代の関係をiもしくはpで大きく分類し、第1世代と第3世代は2世代の場合と同様上の世代を上付き文字で、下の世代を下付き文字で記載する。例えば、40代の子育て夫婦が65-74歳の両親と同居している場合はⅢ_p⁴⁰となり、75歳以上の単身の親・50歳の単身の子・20歳の単身の孫による世帯はⅢ_i⁷⁵となる。更に4世

Fig.5 Number of households per family type of questionnaire
アンケート回答者の家族類型ごとの世帯数

代については、3世代の場合と同様に中間の2世代の関係をiもしくはpで大きく分類し、第1世代を上付き文字で、第4世代を下付き文字で記載する。

具体例として若年の子育て世帯は Π_{11}^p となり、単身の前期高齢者世帯は I_{14} 、3世代同居（現役夫婦と単身の前期高齢者及び18歳未満の子）は Π_{11}^p となる。このように表現することで、多様化が進む社会において、少数の類型も把握することができる。

3-3. ハイツにおける家族について (Fig. 5)

3-2. をもとに団地内の世帯を分類する。まず世代の数で見ると、1世代による家族が890世帯、2世代による家族が825世帯、3世代による家族が124世帯、4世代による家族が1世帯となった。

各類型ごとに分類した結果は (Fig. 5) で示したとおりになる。類型分類名を囲んでいるものは上位10類型であり、 I_{p4} （前期高齢者を含む夫婦）が367世帯、 Π_{11}^p （若年の子育て世帯）が362世帯と支配的に多く、続いて I_{p3} （50歳以上65歳未満の夫婦）が179世帯、 Π_{12}^p （50歳以上65歳未満の夫婦と19歳以上50歳未満の子による世帯）が162世帯、 I_{p5} （後期高齢者を含む夫婦世帯）が109世帯、 Π_{12}^p （前期高齢者を含む夫婦と19歳以上50歳未満の子による世帯）が93世帯、以下 I_{15} 、 I_{14} 、 I_{p2} 、 I_{13} の順となっている。ここで、3世代のものについては最も多い類型でも21世帯と各分類ごとの数は少ないものの、一定数いるため参考としてまとめてⅢとして分析に加え、以下では計11類型について論じる。

3-4. 国勢調査との比較と各類型における近居の有無 (Fig. 5)

家族類型を行っている代表的な統計である国勢調査での分類と比較を行う。国勢調査では夫婦を中心とした類型となっており、親族のみの世帯を核家族世帯4種と各家族以外の世帯10種に分類し、他に非親族を含む世帯、単独世帯としている。今回の類型を国勢調査による分類に当てはめると (Fig. 5)、11種が該当し (①～⑪)。これは国勢調査の分類の上位10項目を満たしている。

本研究対象地での上位10類型は、全て①（単独世帯）、②（夫婦のみ世帯）、⑥（夫婦と子供世帯）に含まれてしまっており、近居という世代間の互助について着目した研究においては国勢調査では不十分であることが確認できる。

また、各類型において近居の有無をみると、類型ごとに違いがあることが確認できるので、次章にて近居について論じる。

4. 家族類型と時間距離、家族の関係から見る近居の実態

まず、月1回以上のやり取りがある家族がどのくらいの距離に居住しているのかを確認する。その相手の総数は一人の回答者が複数の家族とやり取りがあるものを含めて2,107件となった。相手のところへ行き来するのにかかる時間を集計し、時間距離を累積すると (Fig. 6)、どのくらいの距離のところに相手が居住しているのかを確認することができるが、約3割の人が15分以内、約5割の人が30分以内、約8割の人が60分以内に居住していることが確認できた。ここで、何かあったときにすぐに駆けつけられるといった観点と、行き来がある家族のうち8割が60分以内に居住していることから60分以内に居住している家族の有無が重要と考え、60分以内に居住し行き来がある家族を近居家族とする。

本章では上記時間距離、近居相手との関係、3章にて分類した家族類型を軸として、近居についてを論じる。

Fig.6 Time distance with families meeting more than once a month
月1回以上会う相手との時間距離

Fig.7 Number of households of Kinkyo and their partners (Within 60 minutes only)
60分以内に近居している家族がいる世帯数と相手世帯数

Fig.8 The situation of Kinkyo per family type (p<0.001)
家族類型ごとの近居の状況

4-1. 近居の有無と相手の世帯数 (Fig. 7)

まず、近居をしている人がどれくらいいるのかを確認する。近居家族の有無とその相手世帯数についてみると、55.2%が近居している家族がいることが確認できた。相手世帯数については、56.7%が1世帯、31.8%が2世帯となる。最も多いもので5世帯となった。なお、ハイツ内に近居相手がいる世帯は332世帯（17.5%）であることが確認できた。

4-2. 近居相手との時間距離と家族類型との関係 (Fig. 8)

家族類型ごとの近居の状況を確認するために、近居の有無と近居相手で最も近い相手との時間距離（近居あり：ハイツ内/15分以内/60分以内、近居なし）で分類して比較する。家族類型ごとに比較してみると、ハイツ内での近居割合が高いのは Π_{11}^p であり28.6%にのぼる。次いで I_{p4} が高く22.2%である。15分以内でみると Π_{11}^p

Fig.9 Family attributes and time distance of Kinkyo
近居している相手との関係と時間距離

が最も高く 45.5%、次いで I_{p2} が高く 31.8% となる。60 分以内でみると II_{i1}^{p2} (68.8%)、 I_{p2} (66.7%)、 I_{p3} (66.5%) の割合が高くなっている。一方で、 II_{i2}^{p3} (49.5%)、 III (45.2%) では近居なしの割合が高くなる。

国勢調査による同一分類内で比較すると、①（単独世帯： I_{i5} 、 I_{i4} 、 I_{i3} ）では年齢が高くなるほどハイツ内で近居している割合、15 分以内で近居している割合が高くなる一方で、それ以上の距離では年齢が低いほど割合が高い傾向が見られる。②（夫婦のみ世帯： I_{p5} 、 I_{p4} 、 I_{p3} 、 I_{p2} ）では、ハイツ内で近居している割合は年齢が高いほうが高いが、それぞれ以外の距離では年齢が低いほうが近居している割合が高い傾向がみられる。⑥（夫婦と子供世帯： II_{i2}^{p1} 、 II_{i2}^{p3} 、 II_{i1}^{p2} ）では年齢が低いほどハイツ内およびその他の距離いずれにおいても近居している割合が高くなる傾向が見られる。

4-3. 近居相手との関係と時間距離 (Fig. 9)

60 分以内に近居する相手が各属性でどの程度の距離にどのくらい近居しているのかを確認するために、近居する相手の続柄と時間距離との関係をみると、最も多いものは妻の親（375 世帯）であり、以下、娘（368 世帯）、息子（294 世帯）、夫の親（269 世帯）、姉妹（196 世帯）、兄弟（102 世帯）と続く。上記はおば（12 世帯）、おい（7 世帯）、おじ（3 世帯）、めい（3 世帯）、その他（祖父母やいとこなど：15 世帯）と比較しても多数を占めており、近居においてはこの属性が支配的であることが確認できる。なお、性別を区別しない同じ属性ごとの総数は子（662 世帯）と親（644 世帯）が多く、兄弟姉妹（298 世帯）はその半数ほどとなっている。

また、親、子、兄弟姉妹と同じ属性のなかで比較すると、娘のほうが息子よりも、妻の親のほうが夫の親よりも、姉妹のほうが兄弟よりも多くなっており、女系の親族の方がより多く近居していることが確認できる。また、それぞれの近さについても女系の親族の方が近い距離に多く同様のことが読み取れる。

更にハイツ内での近居に絞ってみると、娘と息子が近居している数はほぼ同数であるものの、全体と同様の傾向が見られ、子、親、兄弟姉妹の近居が多く、女系の親族の方が多いことが確認できる。

4-4. 家族類型ごとの近居相手との関係 (Fig. 10)

近居をしている世帯における近居相手の属性を 4-3. をもとに支

Fig.10 Family attributes of Kinkyo per family type (having kinkyo families)
近居している世帯の家族類型ごとの近居相手の属性

配的である親・子・兄弟姉妹にしぼり、近居をしている世帯を母数として、その相手先ごとの割合を家族類型ごとに分類する。世帯数が多い順に見ると、 II_{i1}^{p2} では、妻の親と近居している世帯は 82.6%、夫の親と近居している世帯は 61.9% となっている。続いて、 I_{p4} では、娘と近居している世帯は 73.8%、息子と近居している世帯は 52.0% となっている一方で、妻の親と近居している世帯は 12.7%、夫の親と近居している世帯は 5.7% と一定数いることが確認できる。更に、 I_{p3} では、娘と近居している世帯は 56.7%、息子と近居している世帯は 41.0%、妻の親と近居している世帯は 32.8%、夫の親と近居している世帯は 24.6% となっており少し年齢が高い I_{p4} と比較すると子と近居している割合が減少し、親と近居している割合が増加することが確認できる。 II_{i2}^{p3} では、妻の親と近居している世帯は 39.8%、夫の親と近居している世帯は 32.4% となっている一方で、娘と近居している世帯は 29.6%、息子と近居している世帯は 28.7% となっており、親のほうがわずかに多い。なお、兄弟姉妹は各類型で一定数おり、特に III （姉妹と近居している世帯は 27.9%、同兄弟 16.2%）、 II_{i2}^{p3} （姉妹と近居している世帯は 22.2%、同兄弟 5.6%）、 I_{i4} （姉妹と近居している世帯は 26.3%、同兄弟 15.8%）ではほかの続柄と近い程度の割合に近居していることが確認できる。

4-5. ハイツ内で近居している世帯同士の位置関係 (Fig. 11, 12)

ハイツ内で近居している世帯同士の関係を町丁目ごとに示すと (Fig. 11)、同じ町丁目での近居が多いことが確認できる。特に皐ヶ丘 9 丁目 (18 件)、桜ヶ丘 4 丁目 (9 件)、皐ヶ丘 4 丁目 (8 件)、桜ヶ丘 2 丁目 (6 件) で多くなっている。同一地区で近居をしている数は、桜ヶ丘が 79 件、皐ヶ丘が 139 件、桂ヶ丘が 8 件であり、別地域で近居をしている世帯は 164 件であった。上記の同一町丁目

Fig.11 Relationship of Kinkyo family members inside states (Aggregate by district and town block)
回答者から見たハイツ内近居家族同士の町丁目別の位置関係

Fig.12 Relationship of Kinkyo family inside states
ハイツ内で近居している家族同士の位置関係

のものを除き、回答者と近居相手の居住町丁目を加算して各町丁目での近居数をみると、皐ヶ丘8丁目-皐ヶ丘9丁目間(10件)、皐ヶ丘6丁目-皐ヶ丘8丁目間(9件)、桜ヶ丘5丁目-桜ヶ丘6丁目(8件)の近居が多いことが確認できる。また、各町丁目ごとの近居をしている総数をみると、多いところは皐ヶ丘8丁目(68件)、皐ヶ丘9丁目(63件)、桜ヶ丘5丁目(54件)となり、少ないところは桂ヶ丘1丁目(20件)、同2丁目(23件)、同3丁目(23件)となった。上記の事柄について、地図上の位置関係で見ると(Fig.12)、近居が多い関係は物理的に近い距離同士であることが確認できる。また、桂ヶ丘地区のように距離が離れていると近居の数は限定的であることが確認できる。これにより、同じハイツ内での近居であっても、同一町丁目や近隣の町丁目での近居が多く、地理的に少し離れると近居は少ないことが確認できる。

4-6. 回答者年齢ごとの親子近居の有無 (Fig.13)

続いて、4-3.にて近居相手として多くはほぼ同数であった親子の関係について絞り、回答者の年齢ごとに親子の近居の有無の割合をみる。(Fig.4)における各世代ごとの親子の近居の割合で分けてみると(Fig.13)、親との近居をしている割合は20代後半で85.7%であり、年齢が上がるごとに減少する傾向が見られる。一方で、子

Fig.13 Respondent's age and existence of Kinkyo (p<0.001)
回答者の年齢別の近居の有無

との近居をしている割合は40代前半で0.7%であり、年齢が上がるごとに増加するが、60代後半で40.7%となった後ほぼ40%前後で横ばいとなる。双方を合わせて、世代ごとの近居をしている割合は、20代後半で85.7%から年齢が上がるごとに減少し、50代前半で減少が止まり、50%前後で推移していくが、60代後半から再び減少し、70代前半再び減少が止まり、40%前後で推移していく。

4-8. 近居状況のまとめと考察

60分以内に近居家族がいる世帯は、55.2%となることが確認できた。家族類型ごとにみると Π_{11}^{p2} (子育て世帯)と I_{p2} (50歳未満の夫婦)、 I_{p3} (50歳以上65歳未満のみの夫婦)で近居している割合が高く、 Π_{12}^{p2} の世帯で近居している割合が低いことが確認できた。相手の属性ごとにみると親子関係とそれに次いで兄弟姉妹が多く、中でも女系の親族関係のほうが多いことが確認できた。また、近居をしている世帯の中で各近居相手がどれくらいいるかを確認すると、最も近居が多い子育て世帯では近居がある世帯のうちの8割が妻の親と近居している。また、世帯の年齢が上がると親との近居が減少し子との近居が増加する傾向が見られる。

ハイツ内での近居については、町丁目ごとに近居している数が異なり、同一町丁目や位置関係が近い町丁目での近居が多いことが確認できた。同時に、それぞれの属性についてはハイツ内外での近居のときと同様に女系の家族間での近居が多いことが確認できた。

更に、回答者の年齢でみると20-30代で近居をしている割合が顕著に高くなるおり、年齢が上がるごとに親との近居が減少し、子との近居が増加していく傾向が見られた。このことから、特に若い子育て世帯にとって近居が重要な役割を担っていると同時に、親に面倒を見てもらうという関係から年齢を重ねると親の面倒を見る・子の面倒をみるという関係に推移し、子に面倒を見てもらうという関係に推移していると考えられるので、次章でその関係について論じる。

5. 近居相手と会う頻度と行き来、その目的との関係

ここまでで近居相手の距離や属性について確認できたので、本章では近居相手との居住距離とやり取りの頻度の関係や相手の属性、近居のやり取りの行き来や目的についての関係を見る。

5-1. 近居相手とのやり取りの頻度 (Fig.14, 15)

時間距離別の近居相手とのやり取りの頻度をみると(Fig.14)、より近い距離に住んでいる家族とのやり取りの頻度が高くなる傾向

Fig.14 Frequency of interaction with by time distance (p<0.001)
時間距離別の近居相手とのやり取りの頻度

Fig.15 Frequency of interaction according to attribute (living within 15 min.) (p<0.001)
15分以内に居住している相手属性別のやり取りの頻度

Fig.16 Coming and going and its purpose with Kinky partner
近居相手先への行き来とその目的

が確認できる。特に15分以内に居住している相手とは65.0%の人が週に1回以上の頻度でやり取りを行っており、11.4%の人がほぼ毎日やり取りを行っている結果となっている。また、それをもとに、15分以内に居住している家族とのやり取りの頻度をその相手属性別にみると（Fig. 15）、週1回以上やり取りをする相手としては娘＝妻の親との関係が他と比較して多く8割程度で最も多く、息子＝夫の親との関係では6割程度であり、兄弟姉妹では姉妹が5割程度、兄弟では3割程度であることが確認できる。性別の差では、ほぼ毎日では娘と息子に差が見られないものの、概ね同じ属性の関係（親・子・兄弟姉妹）においては女系の家族の方がやり取りの頻度が高いことが確認できる。

5-2. 近居相手との行き来とその目的 (Fig. 16)

近居相手とのやり取りをどのように行っているのか、その行き来と目的を、総量を確認し、やり取りを行う相手ごとに分類する（Fig. 16）。総数としては、相手の家へ行く（1,889）、相手が家に来る（1,690）が外で会う（941）よりも多くなる。また、男女差でみると相手が「娘」「妻の親」のほうが「息子」「夫の親」よりも多くなり、前節までと同様の結果となっている。

やり取りの目的をみると、行き来ともに、家での主たる目的は「会話」「食事」「孫の世話」の順になり、外での主たる目的は「食事」が多く「会話」「買い物」の順となっている。近居件数・やり取りの頻度ともに高い娘、息子、妻の親、夫の親が相手の場合における関係をみると、娘や息子の場合は「相手に来る」ことのほうが多い。その目的は全体の傾向と同じく「会話」「食事」が多く、息子の場合は「会話」よりも「食事」が多い。また、娘や息子のところへ行く場合には「会話」「食事」に加え「孫の世話」の項目が大きくなり、その傾向は娘のほうが顕著である。反対に、相手が親である場合には、「相手の家へ行く」のほうが多くなり、その主たる目的は「会話」が他と比較して多くなる。また、夫の親に比べて妻の親のほうが「孫の世話」が減り「買い物の手伝い」が多くなる。さらに、少数ではあるものの、相手が子であるときにあまり見られなかった「介護」の項目が見られ、世代間の認識のギャップと捉えられる。

5-3. 家族類型別に見た近居相手との行き来とその目的 (Fig. 16-A)

それぞれの世帯のタイプや年齢でどのような変化が見られるのか、家族類型別に近居相手との行き来とその目的を分類すると（Fig. 16-A）、多くの類型においては全体の傾向と同じく「会話」「食事」が主な目的となっている。全体で3番めに多かった「孫の世話」がどこで行われているのかを確認する。他の項目と比べて多くっているものは、「家に行く」ではI₁₄、I_{p5}、I_{p4}、II₁₂「家に来る」ではII₁₁となっている。このことから孫の世話の多くは子育て世帯の家に親が行くことで成り立っていることが確認できる。また、「日常的な世話」や「買い物の手伝い」が他の項目と比較して多くっているものは、「家に行く」ではI₁₃、I_{p3}、「家に来る」ではI_{p5}となっている。「介護」が顕著な類型は特にないが、「家に行く」項目ではあるが「家に来る」項目で少ないことから、介護する側とされる側の認識の違いがあると考えられる。

5-4. 近居相手の関係別に見た行き来とその目的 (Fig. 16-B, C)

世帯数の多いタイプのうち、（Fig. 10）をもとに親との近居が多いII₁₁と子との近居割合の多いI_{p4}において、それぞれの近居相手との関係（妻の親・夫の親・娘・息子）で行き来や目的がどの程度変

Fig.17 Coming and going and its purpose with Kinkyō partner who is doing Kinkyō with child
子と近居している人の年齢別やり取りの行き来

Fig.18 Coming and going and its purpose with Kinkyō partner who is doing Kinkyō with parent
親と近居している人の年齢別やり取りの行き来

わるのかということを見る。また、ここでは15分以内とそれ以上でどのように異なっているかという点も確認する。

まず、子育て世帯（II₁₁）をみると（Fig. 16-B）、お互いの家に行き来することが多く、「会話」や「食事」に「行く」ことが多いが、「来る」場合には「会話」「孫の世話」とが多くなっており、子供の家で孫の世話をみることのほうが多い。また、「外で会う」場合は大半が「食事」目的である。

相手の属性をみると、総数は妻の親のほうが多いものの、その傾向は夫の親でも変わらない。しかし、買い物の手伝いに関しては妻の親で高くなっている。近居距離で15分以内か否かで分けて比較すると、妻の親ではさほど傾向は変わらないものの、夫の親が家に来る数は16分以上で少なくなっている。

次に前期高齢者の夫婦（I_{p4}）をみると（Fig. 16-C）、「相手の家に行く」と「相手が家に来る」はほぼ同程度になっている。目的としては、「相手の家に行く」場合には「会話」「孫の世話」「食事」の順になっており、「相手が家に来る」場合には「会話」「食事」「孫の世話」の順になっている。

娘と息子との違いでは、娘のほうが「相手の家」で「孫の世話」をすることが多く、息子のほうが「食事」に「家に来る」事が多い。近居の距離についてみると、娘は距離による傾向の変化は少ないが、息子では15分を超えるとやり取りが減少する。

一方で、総量としては少ないが、この世代（65-74歳）では、孫の面倒を見るための子との近居に加えて、「介護」のために相手の家に行く事があり、孫の面倒を見ることと親の介護をすることが重なっていると考えられる。

5-5. 回答者の年齢と親子の関係ごとに見たやり取り (Fig. 17, 18)

近居相手とのやり取りにおいて、「会話」「食事」が多いことは確認できたが、近居をする上で重要と考えられる共助の関係である「孫の世話」「日常的な世話」「買い物の手伝い」「介護」は誰がどのように行っているのかという点について、回答者の年齢と、親子

の近居の関係から見る。まず、目的によって誰が誰を助けるかが明確である「孫の世話」「介護」と誰が誰を助けるかがわかりにくい「日常的な世話」「買い物の手伝い」を分けて考える。

子と近居している人の年齢別のやり取りをみると (Fig. 17)、「孫の世話」を行っているのは 50 代以上のほぼすべての年代で、特に 55-74 歳では「相手の家に行く」人が 4 割にのぼっている。「介護」については、79 歳以下のすべての年代でわずかながら相手の家に行っている人がおり、孫の世話と介護が重複している可能性がある。相手が家に来るは 70 歳以上で年齢が上がるにつれその割合が増えており、これは介護を受けている側であると考えられる。

「日常的な世話」「買い物の手伝い」をみると、概ね相手が家に来る場合は面倒を見てもらっている可能性が高く、相手の家に行く場合には面倒を見ている可能性が高いと考えられるが、ほぼすべての年代で 1 割程度相手の家に行っており、子の世話をしていると考えられる。一方で、相手が家に来る場合は「日常的な世話」では 55 歳以上で年齢が上がるにつれ増加しており、「買い物世話」では 70 歳以上で年齢が上がるにつれ増加しており、郊外住宅地で買い物に車が必要であることを考慮すると、この年代で面倒を見てもらっていると考えることができる。

親と近居している人の年齢別のやり取りをみると (Fig. 18)、孫の世話では 40 代以下で相手が家に来る割合が高く、面倒を見てもらっていると考えることができる。一方で介護は 50 代以降で年齢が上がるにつれて相手の家に行く割合が高くなり、面倒を見ていると考えることができるが、同時に 60 代では孫の世話で相手の家に行く人も一定数おり、子との近居の場合と同様、親の介護と子の世話が重なっている可能性が高い。

「日常的な世話」「買い物の手伝い」をみると、30 代までは相手が家に来る割合が高く、40 代以降は相手の家に行く割合が高くなり、子と近居している場合と同様に考えると、30 代までは面倒を見てもらう人の割合が高く、40 代以降は面倒を見る人の割合が増えると考えられる。

5-6. 近居相手とのやり取りのまとめと考察

近居相手とのやり取りの頻度をみると、相手の居住距離が近いほどやり取りの頻度が高いことが確認できた。また、最もやり取りの頻度が高い 15 分以内に注目すると、娘と妻の親との関係が最もやり取りの頻度が高く、約 8 割が週 1 回以上のやり取りがあることが確認できた。親子の近居での行き来と目的に関しては、子世代が親世代の家に行くことのほうが多く、主な目的は会話や食事であることが確認できた。また、全体的な割合としては、老親の面倒をみるという側面よりも、孫の面倒をみるという側面のほうが多いと考えられるが、一定の世代ではその双方が重なっている可能性があるということが見られた。

6. まとめと今後の課題

団地全体の居住者の家族の状況を、3 章で類型化して確認することができた。その結果、Ⅱ₁₁ (子育て世帯) と I₁₄ (前期高齢者夫婦) が支配的に多く、その前後の世代が次いで多いことが確認できた。

近居の距離に関しては、4 章で確認したように、月 1 回以上のやり取りがある家族は 30% が 15 分以内に、50% が 30 分以内に、80% が 60 分以内に居住していることが確認できた。60 分以内に近

居家族がいる世帯は 55.2% となり、家族類型ごとにみるとⅡ₁₁ (子育て世帯) と I₁₄ (若年世代の夫婦)、I₁₃ (中年世代の夫婦) で近居している割合が高く、Ⅱ₁₁ の世帯で近居している割合が低いことが確認できた。また、相手の属性ごとにみると親子関係とそれに次いで兄弟姉妹が多く、その中でも女系の親族関係のほうが多いことが確認できた。さらに、世帯主の年齢でみると若い世代ほど近居をしている割合が高くなることがわかった。特に子育て世帯では、親と近居している世帯が多く、近居をしている相手がいるうちの 8 割が妻の親と近居をしていた。また、ハイツ内で近居をしている世帯は 17.5% で、その居住地は同一町丁目や位置関係が近い町丁目での近居が多いことが確認できた。同時に、それぞれの属性については全体と同様に女系の家族間での近居が多いことが確認できた。このことは、既往研究で言われていることと一致しており、より詳細な事象として確認ができた。

近居相手とのやり取りの頻度をみると、5 章にて確認したように、相手の居住距離が近いほどやり取りの頻度が高いことが確認できた。また、最もやり取りの頻度が高い 15 分以内に注目すると、娘と妻の親との関係が最もやり取りの頻度が高く、約 8 割が週 1 回以上のやり取りがあることが確認できた。

近居の数ややり取りの頻度の多くを占める親子関係におけるやり取りの行き来と目的については、子世代が親世代の家に行くことのほうが多く、既往研究で言われていることと同様の傾向が見られたが、その内容を詳細に見ると、主な目的は会話や食事であるが、妻の親や娘は距離に関係なく行き来をしているが、夫の親や息子は 15 分を超えるとやり取りが減少することが確認できた。

また、近居をすることによる共助という点においては、老親の面倒をみるという側面よりも、孫の面倒をみるという側面のほうが強いのではないかという結果が得られたが、同時にその双方を行っている世代もいることが確認された。

今回は近居をしている現状の把握にとどまったが、近居が発生した要因・タイミングや近居が終了した要因・タイミングを把握することや、数は少ないもののシングルペアレントの近居状況を確認することで近居の全容を掴むことができると考えられるので、それを今後の課題とする。

謝辞

本研究を行うにあたって、調査にあたっては財団法人住宅生産振興財団および対象団地の自治会、居住者の方々の多大なる協力のもと行われたことをここに記し、お礼を申し上げます。また、修士課程 (当時) の芦澤健介君、卒論生 (当時) の橋本剛志君には、調査に同行し協力いただいたことを併せて記しお礼申し上げます。

なお、本研究の一部は JP15H02282 の助成を受けたものである。

注

注 1) 2013 年度に東京大学大学院建築計画研究室の行った、「住まいのまちなみコンクール」受賞団体に対するインタビュー調査。

注 2) 自治会の役員へのヒアリングでの確認による。

注 3) 自治会の協力による配布、回収は自治会班長の個別訪問・自治会館設置ポストへの投函など地区によって異なる。

注 4) 4 章にて詳細に確認するが、8 割の人が 60 分以内に居住していること、参考文献 1)2)3) などでも、60 分を境目としていることから、妥当性のある数字だと考えられる。

- 注 5) 本調査においては存在していなかったが、血族以外の同居に関してはそれぞれの世代において + α で表現することができる。また、本研究では対象としていないが、要介護者 c (要介護度併記) や身体障害者 d (身体障害者等級併記) がいる世帯においてはそれらもあわせて表示することができ、その目的に応じて様々な家族形態を表現することができる。
- 注 6) s は単身か否かが重要な場合を区別するための分類のため、1 世代の場合のほか、2 世代以上の上の世代および下の世代が 3 以上である場合、2 世代の上の世代が単身の場合の下世代に用いる。
- 注 7) 例えば、90 代・60 代後半・40 代の 3 世代での同居も考えられなくもないが、限定的であり、中央の世代は概ね現役世代と考えられる。
- 注 8) 図表タイトルに記載の ($p < 0.001$) は、いずれも JMP 13 にてカテゴリデータに対する χ^2 乗検定を行った結果の p 値を表す。

参考文献

- 1) Otsuki T. and Jyusoken eds. : Kinkyo, Gakugei shuppan-sha, 2014.3(in Japanese)
大月敏雄・住総研編：近居 少子高齢社会の住まい・地域再生にどう活かすか，学芸出版社，2014. 3
- 2) Yamato R. : Otona Oyako-no Doukyo, Kinkyo and Enjo, Gakubun-sha, 2017.9(in Japanese)
大和礼子：オトナ親子の同居・近居・援助 夫婦の個人化と性別分業の間，学文社，2017. 9
- 3) Kamiwada S., Torikai K., Yamada H. & Fu K : INTEGRATION INDEPENDENCE OF THE AGED PARENTS WITH SUPPORT BY THEIR CHILDREN FAMILY ON THE SEMI-CLOSE RESIDENTIAL RELATIONSHIP, Journal of Architecture and Planning(Transactions of AIJ), Vol. 68, No. 566, pp.9-16, 2003.4(in Japanese)
上和田茂，鳥飼香代子，山田英代，付開楠：準近居の存在からみた老親世帯の自立と支援を止揚するサポート居住の動向－おやこの居住関係を軸とする高齢者のサポート構造に関する研究 その 1－，日本建築学会計画系論文集，第 68 巻，第 566 号，pp9-16，2003. 4
- 4) Imai N., Ito R. : The Problem of the Parent and Child's Resident Status, and Living Environment of a "Remote Suburban Residential Section" in Haibara-cho, Nara, Journal of home economics of Japan, Vol. 57, No. 11 pp.761-774, 2006.11(in Japanese)
今井範子，伊東理恵：親子の居住形態からみた遠隔郊外居住の問題－場奈良県榛原町における－，日本家政学会誌，第 57 巻，第 11 号，pp. 761-774，2006. 11
- 5) Kwak H., Ohara K., Otaki K., & Otsuki T. : A STUDY ON THE LIVINGSTYLE OF THE YOUNG AND OLD FAMILY'S DEVIDED LIVING -In case Seongeup Folk Village in Cheju, Korea-, Journal of Architecture, Planning and Environmental Engineering(Transactions of AIJ), Vol. 66 No. 541, pp.63-69, 2001.3(in Japanese)
郭喜碩，大原一興，小滝一正，大月敏雄：分家を慣習とする村落における親子二世帯の住まい方に関する研究－韓国済州島城邑民俗村を調査対象として－，日本建築学会計画系論文集，第 66 巻，第 541 号，pp. 63-69，2001. 3
- 6) Kim Y., Fujioka Y., Kato H., Yamaguchi T., & Ohara K. : RESEARCH ON CHARACTERISTICS OF GOING-OUT ACTIVITY FROM CLOSE-RESIDENTIAL RELATIONSHIP IN SUBURBAN HOUSING ESTATES, Journal of Architecture and Planning(Transactions of AIJ), Vol. 81 No. 728, pp.2163-2172, 2016.10(in Japanese)
金由羅，藤岡泰寛，加藤仁美，山口剛史，大原一興：郊外住宅団地における親族近居世帯の外出行動の特徴に関する研究－親族近居世帯間の相互支援に着目して－，日本建築学会計画系論文集，第 81 巻，第 728 号，pp. 2163-2172，2016. 10
- 7) Hino K., Ishii N., Sekiguchi T., & Baba H. : CURRENT SITUATION AND BENEFITS OF LIBING NEAR RELATIVES IN A FAR SURBURBAN RESIDENTIAL AREA, Journal of Architecture and Planning(Transactions of AIJ), Vol. 83 No. 750, pp.1497-1504, 2018.8(in Japanese)
樋野公宏，石井儀光，関口達也，馬場弘樹：遠郊外住宅地における近居の実態と意義－埼玉県日高市こま武蔵台を対象として，日本建築学会計画系論文集，第 83 巻，第 750 号，pp. 1497-1504，2018. 8
- 8) Fukai Y., Yabuki M., Otsuki T., & Nishide K. : A Study on Acquisition of Diversity of Residents in Detached Housing Stepwise Development,

Summaries of technical papers of Annual Meeting Architectural Institute of Japan, No. 9, pp.151-160, 2015.12(in Japanese)

深井祐紘，矢吹慎，大月敏雄，西出和彦：段階的開発された戸建住宅団地における居住者の多様性の獲得に関する研究－地方都市の郊外戸建住宅を対象として－，住宅系研究報告会論文集，第 10 巻，pp151-160，2015. 12

- 9) Kaido K. : Management of sustainable residential areas, Ie-to-Machinami, Vol.30, No. 2, pp.20-35, 2011.9(in Japanese)

海道清信：持続可能な住宅地マネジメント 桜ヶ丘ハイツ 40 年の物語，家とまちなみ，第 30 巻，第 2 号，pp. 20-35，2011. 9

- 10) Kaido K. : Aiming for a Hundred-Year Residential Area, Urbam Housing Sciences, No. 91, pp.151-152, 2015.4(in Japanese)

海道清信：百年住宅地を目指して－岐阜県可児市桜ヶ丘ハイツ－，都市住宅学，第 91 号，pp. 151-152，2015. 4

A STUDY OF LIVING NEAR RELATIVES AND FAMILY TYPE IN SUBURBAN DETACHED HOUSING ESTATES AS THE TARGET “SAKURAGAOKA-HAITSU” IN KANI CITY, GIFU PREF

– Through analysis based on family type considering life stage –

Yoshihiro FUKAI^{*1}, *Makoto YABUKI*^{*2}, *Toshio OTSUKI*^{*3}
and Yonggeun LEE^{*4}

^{*1} Reseacher, Placemaking Institute Inc., Dr.Eng.

^{*2} Former Dept. of Arch., Graduate School of Eng., Univ. of Tokyo, M.Eng.

^{*3} Prof., Dept. of Arch., Graduate School of Eng., Univ. of Tokyo, Dr.Eng.

^{*4} Assist. Prof., Dept. of Arch., Graduate School of Eng., Univ. of Tokyo, Ph.D.

In recent years, a phenomenon called 'Kinkyo' which is living near by is attracting attention, but it is not performed to grasp the actual situation in detail.

this study performed questionnaire survey to grasp the situation of 'Kinkyo' in the suburbs detached housing development.

At first, we performed that we confirmed the family type every household because a phenomenon called 'Kinkyo' was to occur in the relations with a household and the household. Therefore we performed the trial for a new family type to confirm the situation that we could not grasp with the existing family type. we ware able to thereby classify the families who were not able to finish grasping it in the existing national censuses.

Second, we confirmed it about the quantity, distance, the relations with the partner about a point whether was that how doing 'Kinkyo'. As a result, the household where a family was with the exchanges was able to confirm that 80% lived in the distance within 60 minutes more than once a month. In addition, there was more 'Kinkyo' of parent and child than other relations, and there were more relations between the women including the wife's parent and the daughter and was able to confirm that it was near. Furthermore, we was able to confirm that the ratio that 'Kinkyo' did near was high when we watched the situation of 'Kinkyo' in 10 higher types in a family type so as to be young in the second generation families so as to be old in families of one generation.

Finally, we confirmed it about a point whether was that how became the exchanges in the relations of parent and child with much 'Kinkyo' in particular. As a result, the contents such as a conversation and a meal there became many in total, but a characteristic was different when we watched it according to a family type, for example it increase taking care of the grandchild than others in a child care household and the generation of these parent, and the parenthood of the woman was able to confirm more things that we exchanged here. Furthermore, in the generation about 60 generations, we ware able to confirm the actual situation that a thing and the care of the parent that took care of the grandchild were piled up.

(2019年8月8日原稿受理, 2019年12月18日採用決定)